BOOK X — 見えざる戦争

第06章 — 軍事的例外

01 — 最終ページの例外規定

午前七時、地方施設に配属された人員に、二つある会議室のうち小さい方で説明会を行うとの連絡が入った。M-06は指定された時刻より早く到着した。職員が机の上に資料を並べ、閲覧を許可された人々の座る位置に合わせて、一部ずつ間隔を空けて置いていた。

彼女が座るよう指示された椅子の前には、資料がなかった。

ほどなくM-04が入ってきた。彼女の隣に座り、時計を見た。M-08は医療部門の係官とともに到着した。左腕の痕は袖に隠れていた。

説明会を担当する係官は、これまで二度にわたって起きたロイ・バッティとの遭遇のいずれにも立ち会っていなかった。提出された報告から、どのような状況で実力を行使すべきかについて、人員の理解に差があると結論づけていた。

その差をなくすつもりだった。

係官はまず、承認文書のうち対象者の回収に関わる部分を読み上げた。回収の理由に関わる部分は読まなかった。M-06が指示に変更があったのかと尋ねると、明確化が行われているのだと答えた。

「診察に関する要請も含まれますか？」

係官は医療部門の代表者の方を向いた。

代表者は、承認された施設への移送後に対象者の診察を行えると述べた。対象者の状態から移送が望ましくないと判断される場合には、移送前に医療上の援助を提供できるという。

「その状態は誰が判断するのですか？」とM-06は尋ねた。

「医師がいる場合は、医師が」

「それまでは？」

説明会を担当する係官は、人員は受けた訓練に従って行動することを求められていると答えた。

M-06は係官を見た。これまでにも何度か、同じような指示を受けたことがあった。その指示が、受ける側にほとんど何も伝えていないということについて考える理由は、これまでなかった。

M-08は対象者の身体能力の推定値が改訂されたかどうかを尋ねた。医療部門の代表者は、改めて推定するには情報が不十分だと答えた。次の遭遇に備える計画には、従来の推定値を用いることになっていた。

「私が会ったとき、彼は負傷していました」とM-08は言った。

「評価には含まれている」

「遭遇の最中に、また負傷しました」

代表者は手元の資料に目を落とした。遭遇後に測定された数値は受け取っていないと答えた。

M-08は、それを測定できる状況にはなかったと説明した。

しばらく誰も口を開かなかった。三人の人員は、捜索に関わるほかの誰よりも多くのロイに関する情報を司令部に提供してきた。それでも司令部が得ている情報だけでは、彼に近づくべきなのが医師なのか、また別の兵士なのかすら判断できなかった。

係官は、作戦が実施される条件を記した一枚の文書を配布した。国家の連続性に関する規定の参照番号の隣に、はるかに小さな文字で別の参照番号が印刷されていた。M-06は以前にも施設内の文書でそれを見たことがあったが、施設外の人間に関する文書で見たのは初めてだった。

彼女はその意味を尋ねた。

「軍事的例外の適用を定めるものだ」

「対象者への適用ですか？」

「作戦への適用だ」

彼女はもう一度、その一文を読んだ。どちらの意味にも読み取ることができた。

M-04が退出前に各自の写しを返却すべきかと尋ねた。作戦期間中はその文書を保持してよいとのことだった。机の上にあった資料は室内に残さなければならなかった。

廊下に出ると、M-08は窓際で足を止めた。建物の間で職員を運ぶ車両が中庭に到着していた。そのうち一台から二人の男が容器を降ろすのを見ていた。

「医師の報告書を見たか？」とM-06に尋ねた。

「いいえ」

「君には渡されたのかと思った」

彼女は理由を尋ねた。

「君が求めたからだ」

彼女が求めたのは報告書ではなく診察だったと説明する前に、彼は階段を下りていった。

彼女は文書を手にしたまま窓際に残った。全文の閲覧を許されたことのない文書の最終ページに、一つの規定がある。それは、ある人間に対して何を行うことが許されるのかを記しているように思えた。その朝まで彼女は、自分のような人間に対してのみ行えることを記した規定だと思っていた。

02 — 公開された電話番号

翌朝、電話の電源を入れると、ロイはメッセージの送信待ちの表示がなくなっていることに気づいた。閉まっている店のひさしの下に座っていた。ビジネスセンターの女性は建物が施錠されるまで中にいることを許してくれたが、その後の数時間の大半を、何を待っているのかと尋ねられずに座っていられる場所を求めて歩き回って過ごした。

レイチェルがメッセージを読んだことを示すものは何もなかった。

通信事業者からは別のメッセージが届いており、この地区で複数の通信障害が報告されていることを利用者に知らせていた。地図へのリンクが含まれていたが、ロイは開かなかった。

代わりにレイチェルから送られた電話番号を見た。その番号を使ってできることはいくつかあった。彼女と話すことを試みてもいい。医療協会に伝言を頼むこともできる。彼女が言っていた援助が自分にも受けられるのか、確かめることもできた。

どれを選ぶか決めないまま電話をしまおうとして、右手の指で電話を握ることができないことに気づいた。

しばらく身動きせずに座っていた。手の感覚が完全に失われたわけではない。親指の側面に触れる電話の冷たい表面は感じられた。彼を不安にさせたのは、意志と、それに続く動作との間にあったはずの、慣れ親しんだ関係が失われていることだった。

電話を膝の上に置き、もう一度試した。

かつてなら、この種の負傷は身体が自らを修復するまでのわずかな間、不便を感じるだけのことだと考えただろう。病院で、修復には複数の種類があると知った。生き延びるために不可欠ないくつかの過程は、修復された組織を後に使うことがかえって難しくなるような形で進む場合がある。

今、それが起きているのかは分からなかった。

通りの向かいで、店主が窓の前の金属製シャッターを上げていた。ロイは近づいて、近くに電話をかけられる場所がないかと尋ねた。店主は通りの中ほどにある自治体の建物の入口を指さした。

建物の中には住民が公共サービスについて案内を受けられる窓口があった。窓口の女性は、椅子が並ぶ一角の脇にある電話を教えてくれた。礼を言い、自分の電話の画面に表示された番号を読んでから、電話をポケットに戻した。

医療協会の職員が電話に出た。

ロイは、ここ数日のうちに協会と取り決めを交わした女性への伝言を受け付けてもらえるかと尋ねた。

「通信記録の参照番号はお聞きになっていますか？」

「そちらの電話番号だけです」

職員は、そのサービスを担当する部署の者に代わることができると答えた。ロイは電話が転送されるのを待った。

セラ・ミンと名乗る女性が出た。伝言を残したいのか、問い合わせをしたいのかと尋ねた。

「できれば、両方です」

ロイはレイチェルの名を告げた。ミンはどのような伝言を残したいのか尋ねた。彼は、番号を受け取ったことと、自分が生きていることを伝えてほしいと言った。

「彼女から折り返し電話をしてもらいますか？」

「いいえ。この番号にはかけないでください」

「伝えておきます」

ロイは礼を言った。通話を終えようとしたとき、自分が問い合わせもしたいと言ったことを思い出した。

「医師の診察を受けられるように手配していただけると聞きました」

ミンは、その人は自分で話すことができるのかと尋ねた。

「私のことです」

彼女は、通常なら病院での治療が必要になるような負傷についての相談を検討することに、一人の医師が同意していると説明した。午前中にその医師と連絡を取れる番号を教えることができる。しかし、診察だけで十分かどうかを医師に代わって判断することはできなかった。

ロイは、住所を伝える必要があるのかと尋ねた。

「私には必要ありません」と彼女は言った。「医師は、あなたがどこまで出向けるのか尋ねるかもしれません。その先のことは、医師と相談して決めてください」

窓口の女性からもらった紙に番号を書き留めた。文字を書くのは遅く、困難だった。結局、最後の数桁を書いてもらえないかと女性に頼んだ。

ミンにはそのやり取りの一部が聞こえていた。何が起きたのかは尋ねなかった。

通話を終えると、彼女は伝えてほしいと頼まれた言葉をそのまま書き留めた。通信記録簿には、この種の伝言のためにあらかじめ欄を設けてあった。通話時刻を記入し、返信先の欄は空白のままにした。

自治体の建物の中で、ロイは手を貸してくれた女性に礼を言った。しばらく電話のそばに立ち、教えられた番号を見つめた。

自分の居場所を知らない誰かが、実際に利用できるものを与えてくれたのは、この数日間で初めてだった。

03 — 資料の移管先

エイドリアンが記録部門に復元を依頼していた記載は、正午少し前に閲覧できるようになった。一枚のページで、下半分に実験記録一式の移管時に記入された参照番号の一覧があった。余白にはさらに、移管の権限が更新されたことを示す記載があった。

彼は生体部品の製造を行う機関の名称が見つかると思っていた。だがページを調べてみると、元の機関は収録資料の作成ではなく、記録一式の管理を担っていた可能性の方が高かった。

参照番号のうち二つの隣に、見覚えのある記号があった。

病院の資材供給用の書式で見たことのある記号だった。以前の形式では、機関の通常の在庫に含めてはならない資材を区別するために用いられていた。その手続きは、人工人間の開発を規制する組織が複数存在していた時代にさかのぼるものだった。

資材自体に何か特異な点があることを必ずしも示してはいなかった。別の誰かがそれに対する責任を保持していたということを示していた。

エイドリアンはそのページをイマニの執務室へ持っていった。彼女は別の病院の医師から送られた画像一式を調べていた。彼はそれが終わるまで待った。

「参照番号は一連の文書とともに移管されたものです」と彼は言った。「病院が作成したものではありません」

彼女はページを見た。

「その文書一式を見つけられますか？」

「一部なら、もしかすると。移管の承認文書が必要です」

彼は余白の数字を指さした。医師はその記載の何が気になるのかと尋ねた。

「記録を移動させる権限が、誰かによって更新されています。元の記載の日付より後のことです」

二つの日付の間には数年の隔たりがあった。後の方の年には、民間機関が人工組織の研究を行うことを許可されていた取り決めの一部が変更されていた。

彼は、家業の代表として招かれたある会議のことを思い出し、次第に居心地が悪くなった。研究機関に供給される資材の所有権が議題だった。出席者の一人が、いくつかの資材に関して所有権という言葉を用いることに異議を唱えた。その異議は、会議後に配布される文書では別の言葉を採用することで解決された。

提案された取り決めのほかの部分は、何一つ変更されなかった。

「資材は軍事計画のものだったと思いますか？」とイマニは尋ねた。

「病院には変更できない取り決めの下で管理されていたのだと思います。それとは少し違います」

彼女は病院の複写機器でページの画像を撮った。それから、原本の保持を許可されているかと尋ねた。彼は渡された写しなら手元に置いてよいと答えた。記録部門が原本の記録簿を保管していた。

「いいですね。どれが記録簿から得たもので、どれがここで私たちが推論したものなのか、印をつけておいてください」

彼女がそう頼んだ理由が分かった。文書同士が互いを裏づけているように見えれば見えるほど、そのつながりの一部は執務室に立つ二人が見いだしたものだということを忘れやすくなる。

午後、彼は記録部門の職員と再び会った。古い移管予定表には、もはや当初の名称では存在しない部署が記載されているという。彼女は行政組織再編の名簿で、後継機関への参照を見つけていた。

その機関に問い合わせを行うことは可能だった。病院自体には文書を取り戻すことができなかった。

彼は名称を尋ねた。

彼女は書き留めてくれた。名称には実験医学への言及が一切なかった。例外的な取り決めの下で資産を保持する責任を負う部門とされていた。その部門は国防事務局内の部署の監督下にあった。

エイドリアンには聞き覚えのない名称だった。どのような種類の資産を管轄していたのか、情報があるかと尋ねた。

「この名簿にはありません」と職員は答えた。

時間がかかってしまったことを詫びる彼女に、まさに探していたものを見つけてくれたのだと答えた。

研究室に戻ると、彼はそのページを予備実験の記録の隣に置いた。一方のページには、文字と数字の組み合わせで試料が識別されていた。もう一方には、まったく異なる文字と数字の組み合わせで一連の記録が識別されていた。そして今、その二つの間には軍の部署を示す文書上の参照が存在していた。

それでも、ある人物を特定するものは何もなかった。

彼は医療協会に電話し、レイチェルと再び話せるようミンに手配を頼んだ。前回の照会記録に追加すべき参照番号を入手したと伝えた。

声明文に機関の名称を含めたいかと尋ねられ、そうしてほしいと答えた。

研究が中断されて以来初めて、文書を調べている人々は、問いを向けることのできる機関の名称を手にすることになる。

しかし、そこから答えが得られる機関なのかどうかについては、朝よりも確信が薄れていた。

04 — 自らの名による要請

午後の指導時間が終わると、M-06は医療部門へ向かった。医師が別の人員の着替えが終わるのを待っていた。彼女は部屋の外にいた職員に、予約を取れるかと尋ねた。

職員は診察の記録に用いる書式を取り出し、どのような診察が必要なのか尋ねた。

施設の外で診察を受けることが可能かどうか、医師に相談したいのだと答えた。

職員は書式を見た。通常なら患者の識別番号を記入する欄に、彼女の識別番号を記載していた。

「そうするように指示されたのですか？」

「いいえ」

「ここでの診察に何か問題があるのですか？」

「分かりません。それも誰かに相談したい理由の一つです」

職員は次の定期診察についての問い合わせには慣れていた。診察と診察の間に人員の能力に変化があった場合、追加の評価を申請することができる。そのことを説明した。

彼女はその手続きについて知っていると答えた。

「では、医師に何を評価してほしいのですか？」

「まだ決めていません」

その答えでは職員が書式に記入しにくいことは、彼女にも分かった。自分の能力を評価してほしいのではない。自分が任務に投入できる状態にあるかどうかを判断する責務を負わない医師の患者になることができるか、尋ねているのだと説明した。

職員は上司に相談する間、待っていてほしいと言った。

廊下の先の部屋では、M-04が民間職員の一人と座っていた。職員は保守点検の日程変更について説明を求められていた。二人の間の机には図表が置かれていた。医療部門へのどの訪問を任務中に使用する装備の定期点検と合わせて行えるかが示されていた。

M-04は装備の定期点検を延期すると、診察の日程にも影響するのか尋ねた。

職員は別々に手配できると答えた。

「では、そうしてもらいたい」

何か特別な理由があるのかと尋ねられた。別々にしておいてほしいのだと答えた。職員はそれ以上尋ねずに変更した。

部屋を出ると、廊下のベンチにM-06が座っていた。彼は具合が悪いのかと尋ねた。

「いいえ。少なくとも、そうは思っていません」

彼女は職員に何を尋ねたのか話した。

彼はしばらく黙っていた。それから、前回の診察で、結果を司令部に開示することに同意する文書への署名を求められたと語った。開示を拒否することは許されるのか、医師に尋ねたという。医師は、結果を取得する根拠となった規定では、その文書への署名は要求されていないと答えた。

「ではなぜ署名を求められたのですか？」とM-06は尋ねた。

「分からない」

職員が戻ってきた。上司にも、どの手続きを用いるべきか判断できなかったという。彼女の任用条件を管轄する部署に、書面で問い合わせを提出することならできた。

彼は一枚の紙を差し出した。

彼女は礼を言い、書く場所を探しに行った。M-04も談話室まで同行した。そこには数人の人員がおり、全員がその日の残りの時間を施設で過ごすよう配属されていた。

彼女は要請を質問の形で書いた。書き終えると、その質問は自らの医療に関するものであり、作戦中に行ったいずれの報告の修正でもないことを明記する一文を加えた。

彼女に促され、M-04はそれを読んだ。

「どこが悪いのかと尋ねられるだろうな」と彼は言った。

「そうかもしれません」

「何と答えるつもりだ？」

彼女は紙に目を落とした。前日の夜の一部を使って、路面電車のホームで起きたことが、訓練を受けてきた任務の不履行に当たるのか考えていた。今は、その答えを報告する義務のない人間に、その問いを向けられる場所があるのだろうかと考えていた。

「尋ねるために、まず病気にならなければならないとは思いたくありません」と彼女は言った。

与えられた識別番号で要請書に署名し、窓口に提出した。

職員はほかの通信文書と一緒にそれをトレーに置いた。これまでの彼女の要請とは違い、軍が捜索するよう命じられた人物に関するものではなかった。そのため、別の部署へ送られることになった。

その方が、誰かが答えを出しやすいかもしれない。立ち去りながら、彼女はそう思った。

05 — 法が語らなかったこと

セラ・ミンはレイチェルを待っている間に、病院から新たな声明文を受け取った。添えられた書簡には、協会がすでに保管している文書とともに声明文を保全してほしいとの要請があった。国防事務局内の部門を示す参照情報と、その情報がどのように得られたのかについての説明が記されていた。

彼女は書簡の写しを取り、協会の法律関係の資料室へ持っていった。

病院の職員がその部門を見つけた名簿は、そこにもあった。名称の変更は、民間機関に課される通常の報告義務を免除された複数の機関に及ぶ組織再編の過程で行われたことが分かった。名簿には、その活動の内容までは記載されていなかった。

ただし、各機関の設立根拠となった法令への参照はあった。

ミンは法令とその後の改正条項を読んだ。当初の規定は国防に必要な資材の供給と装備の開発に関するものだった。後の改正では、民間による監督が活動の目的と両立しないと判断された場合に、別個の監督条件を設けることが認められていた。

見覚えのある文言だった。数年前、政府の施設に勤務する医師に類似の規定が及ぼす影響について、協会に相談が寄せられたことがあった。当時の助言は、医師が業務中に得た情報をどのような条件で開示できるのかに関するものだった。

資料室の索引から協会の意見書を見つけた。添付された記録によると、改訂版の意見書が求められていたが、一度も発行されなかった。

レイチェルは二時を少し過ぎた頃に到着した。ミンは玄関ホールで出迎えた。

「あなたへの伝言があります」

二人は上の階へ向かった。ミンは通信記録簿から該当するページを取り出し、ロイが伝えてほしいと頼んだ言葉をレイチェルに渡した。レイチェルは二度、それを読んだ。

「彼と話したのですか？」

「ええ」

「どんな様子でしたか？」

ミンは少し考えた。彼は自分が何をしたいのか、説明できる状態だったと言った。医師と話すことも希望しており、連絡先の番号を教えたと伝えた。その番号を書き留めるのに、誰かに手を貸してくれるよう頼んでいたことは伝えなかった。

「彼の方からお願いしたのですか？」

「ええ」

レイチェルは腰を下ろした。彼が生きていると分かったとき、自分がどう感じるのか想像してきた。だが安堵したからといって、彼がどこにいるのか知りたいという気持ちはほとんど変わらなかった。

ページに残された空欄を見た。

「電話番号は残さなかったのですか？」

「折り返しの電話はしないように、と頼まれました」

レイチェルはうなずいた。自分が受け入れてほしいと頼んだ取り決めだった。彼がそれを受け入れたことを悔やむ理由はないはずだった。

ミンは数分待ってから、病院から届いた新たな声明文を見せた。その部門の行政上の沿革について判明したことを説明した。

「人工人間に関する法律に、例外を設けることができるのですか？」とレイチェルは尋ねた。

「独自の監督条件をいくつか設けることはできます。それが規定に書かれていることです。その規定に基づいて、実際に何が行われたのかは別の問題です」

レイチェルは、六年の寿命制限が軍事目的で製造された人々にも適用されていたのか知りたかった。エイドリアンとは病院でその問題について話し合ったことがある。当時は、どの機関に問いを向ければよいのかを示す文書を持っていなかった。

ミンは、読んだ資料の中に答えを示すものはなかったと言った。その規定に基づく命令に、答えが含まれている可能性はあった。仮に存在するとしても、公表されていないかもしれない。

「あの人たちがどれだけ生きるのか、知っていなければならないはずです」とレイチェルは言った。「少なくとも、調べようとはしたでしょう」

「おそらく」

レイチェルは、エイドリアンが説明できない反応を見つけた実験結果のことを思った。生命を延ばす試みに用いられた資材についての文書が、どのように変更されたのかを調べてきた。情報を得ようとしている機関の一つには、自分たちが取り除こうとしている制限を守る義務が、そもそも一度も課されていなかった可能性がある。

その違いが、当の機関にいる人々に知らされたことがあるのかどうかは分からなかった。

ミンは改正条項の一節に注意を促した。別個の命令を発する権限は、ある活動について規定されていた。その活動に関わることになった個人が、ほかの場所で得られる保護のすべてを失うとは記されていなかった。

「機関に課される義務の例外と、たまたまそこにいる人の権利に対する例外とでは、違いがあるのかもしれません」と彼女は言った。

レイチェルは、政府がその違いを認めているのか尋ねた。

「それは、私たちが政府に尋ねなければならないことかもしれません」

06 — 報告を伴わない診察

リアン医師は、数人の独立した医療従事者が働く建物の二階で、二つの部屋を使って診療を行っていた。以前は自治体の病院で外科医をしていたが、今では医療協会から相談の紹介を受ける医師の一人になっていた。午前の予約診療が終わる少し前に、ロイから電話があった。

ロイは手に生じている不自由について説明した。彼女に求められ、肩の負傷と病院を出てから起きた変化についても語った。

彼女は、一人でいるのか、状態が悪化した場合には誰かに付き添ってもらって医療施設へ行くことができるのかと尋ねた。

ロイは一人だと答えた。

午後に診療所を訪れることで合意した。必要になるかもしれない検査の一部は、そこで実施できないと彼女は念を押した。ロイは理解していると答えた。

到着すると、待合室では年配の男が受付の職員と処方箋について話していた。扉の上には時計があり、窓際の机には植物が置かれていた。どこにでもある部屋だった。そこにいる理由もごく普通のものだというように振る舞うことが、これほど難しいとはロイ自身も思っていなかった。

リアンは自ら彼を呼びに出てきた。

診察室で、病院で受けた治療についての文書を何か持っているかと尋ねられた。ロイは何も持ってきていないと説明した。彼女は協会から送られた文書を見せた。イマニが望ましいと考える検査について記したものだった。

「これは私に関するものだと思います」と彼は言った。

「作成した医師に連絡してもよろしいですか？」

「ええ。医療上のことについてなら」

彼女は文書を脇に置いて、診察を始めた。

抵抗を加えた状態で彼が行える動作そのものよりも、抵抗のない状態で同じ動作をした際に現れる違いに、彼女は関心を持った。ある動作では、目を閉じて繰り返すように頼んだ。ロイは、彼女が示した位置に達する前に動きを止めた。

「もっと先まで動かしたと思ったのですが」と彼は言った。

彼女は記録した。肩の周辺にあるいくつかの組織の状態には不明な点が多く、この診察だけで診断を下す気にはなれなかった。画像検査で何が明らかになり、何が明らかにならないのかを説明した。

ロイは、どの程度までなら安全に腕を使えるのか尋ねた。

「数値でお答えすることはできません。ただ、それを知るために腕を試しに使うべきではありません」

彼は一瞬、微笑んだ。病院の研究室では、自分に何ができるのかを確かめたい人々からの要請に慣れていた。できることが、必ずしもやるべきことではないと告げられるのは、奇妙な経験だった。

医師は、休息できる場所に滞在することができるかと尋ねた。

「しばらくの間なら、おそらく」

彼女は彼を見た。診察の間に、彼が自分の事情について、あることは説明したがっていないのが明らかになっていた。それをいつ説明するかは、彼に任せるつもりだった。しかし、追加の治療を受けることなく、いつまでも負傷に対処できるのだという印象を持ったまま帰らせるわけにはいかなかった。

彼女は、どのような場合に直ちに医療上の援助が必要になるかを説明した。また、可能であれば翌日再び来てほしいと頼んだ。状態の変化を診察するためだった。

診察が終わる前に、ロイはどのような情報を協会に伝えることになるのか尋ねた。

「あなたが希望されるなら、診察したことは伝えます。診察の所見まで渡す必要はありません」

「病院には？」

「あなたの許可を得たうえで、担当医と話し合う必要があることだけです」

彼は彼女が診察結果を書き記した紙を見た。自分が帰った後も、その紙はこの部屋に残る。彼女との間で交わした取り決めによって、後になって紙が部屋の外へ出ていく可能性がすべてなくなるわけではなかった。

「ほかの誰かが、それを出すよう求めてきたらどうなりますか？」と彼は言った。

彼女は、そのような要請があれば権限と目的を確認する必要があると説明した。これまでにそうした要請を受けたことはない。これからも決して受けないと約束することはできなかった。

彼はその答えを受け入れた。彼女に守る力のない約束よりも、その答えの方が安心できた。

受付の職員が次の予約を手配している間、彼は待合室の窓際に立った。通りの向かいでは、女が子供を小さな車に乗せようとしていた。子供が歩道に何かを落とした。女がドアを閉める前に、二人でしばらくそれを探した。

ロイは車が走り去るのを見送った。診察を受けていた間、自分の身体の未来を、自分自身の未来であるかのように考えることができていた。

たった一時間がどれほど違いをもたらし得るのか、彼は忘れていた。

07 — 権限の限界

デレンの要請に対する回答が司令センターに届いたのは、その日の午後遅くになってからだった。第一段落では、確保命令の変更は一切承認されていないことが確認されていた。第二段落では、作戦の過程で医療上の援助を提供することが可能だと確認されていた。第三段落では、代替措置の案については、最終的に対象者の身柄の管理を担う機関と協議するよう司令部に指示していた。

大尉は苛立ちを募らせながら文書を読んだ。軍の管理下へ移送することなく診察を行えるかと尋ねたのだ。それに対して送られてきたのは、どのような条件で身柄を確保できるかを説明した三つの段落だった。

彼はその文書をヴェイルのところへ持っていった。

「彼の状態によって回収が危険になる場合、どうすべきかについて何の勧告もありません」と言った。

ヴェイルは第三段落を読んだ。当初の命令では、一定の状況において確保を延期することが認められているとデレンに念を押した。

「では、延期する権限は誰にあるのですか？」

「現場では君が判断していい。命令そのものを停止することはできない」

デレンはその区別を理解していた。回答によって、前者の判断が後者につながらなかった理由を後から説明しなくても、現場で判断を下せるようになることを期待していたのだ。

彼は、病院の研究記録を受領した協会の通信を調べる権限が与えられたのか尋ねた。

ヴェイルは、協会は関係機関として特定されていると答えた。最近の病院との接触に関する照会が準備されている。回収に従事する人員が協会の施設内に入る必要はないという。

「個人が行った医療上の相談も対象になるのですか？」

「照会の条件は管轄機関が決定する」

デレンは持参した紙を見た。この一週間、別々の建物にいる二人から、医療を必要としていると思われる者に遭遇した場合はどうすればいいのかと尋ねられた。どちらも納得のいく回答を得ていなかった。それにもかかわらず、医療を求める者に関する情報を取得する権限が、別の部門に与えられていた。

彼はヴェイルに、医師から得た情報の利用を一時的に制限することを検討してほしいと頼んだ。

ヴェイルは提案を提出してよいと答えた。通信に関する取り決めは、彼らの司令部だけで管理しているものではなかった。

執務室に戻ると、人員施設からの通知が届いていた。M-06が施設外での診察について問い合わせを提出したとのことだった。管理担当の係官は、その問い合わせが作戦の対象者に関して未処理となっている要請と関係するのかどうか確認したがっていた。

デレンは通知を読んだ。要請書の最後の一文も含まれていた。彼は、この問い合わせを作戦の一部とみなす根拠はないと記した。

回答を施設に送信した。

画面の下部で、目撃情報の報告件数が一つ増えた。一般市民から寄せられた情報だった。写真はなく、その特徴は非常に多くの人に当てはまるものだった。

彼は地区司令部に、係官を住所へ派遣する前に追加情報の有無を確認するよう求めた。

地区司令部は指示を受領した。しばらくすると、システムにはその目撃情報が捜索範囲の拡大を担当する部隊にも送付されたことが表示された。大尉が行った送付ではなかった。彼は連絡将校に、なぜ送付されたのか尋ねた。

連絡将校は、その目撃情報が部隊への自動送付のために定められた基準を満たしていたと答えた。

デレンはその基準を入手するよう求めた。

連絡将校が部屋を出ていくと、彼は地図を見た。この一時間に地図に現れた情報のいずれによっても、ロイ・バッティの居場所についての不確実性は減少していなかった。変わったのは、その不確実性に基づいて行動する権限を持つ機関の数だった。

08 — 自ら選べる医療機関

夕方の早い時間までに、リアンはイマニと話をしていた。この診療の取り決めを続けられるのであれば、どのような検査が必要になるか、二人の意見は一致していた。病院の医師は結果の解釈に協力すると申し出たが、リアンのところには、イマニが必要と考える検査のすべてを行えるだけの機器がなかった。

別の機関を見つける必要があった。

医療協会では、ミンが病院の文書の保全に関する取り決めについて情報を求める書簡を受け取った。国家の連続性に関する規定の権限の下で活動する部署からの書簡だった。さらに、その取り決めに関連して協会が通信を交わした人物の身元を明らかにするよう求めていた。

彼女は法務委員会の委員長とともに書簡を読んだ。委員長は、協会の研究関係の通信記録にある情報と、医療紹介記録にある情報を分離できるか尋ねた。

「別々に保管してきました」と彼女は答えた。

「では、そのことを回答の中で明確にした方がいい」

彼女も同意した。書簡には、協会が受け付けたすべての医療相談を調査する権限が明示されてはいなかった。受領確認以上のものを提供する前に、要請の範囲がどこまでなのか確かめるつもりだった。

レイチェルは、エイドリアンが病院から送った声明文を受け取りに来た際に、書簡について知った。協会の施設から出ていった方がいいのか、ミンに尋ねた。

「あなたがここにいることも、どこか別の場所へ行くことも、求められていません」

「でも、彼らはここに来るのでしょうか？」

ミンは分からないと答えた。

彼女は研究に関する声明文の写しをレイチェルに渡した。受領確認書の原本は、保全された資料とともに残すことにした。レイチェルはその取り決めに感謝した。携えている者の身に何が起こるかによって、その文書が残るかどうかが決まるような資料を持ち歩いて、あまりにも多くの日々を過ごしてきた。

立ち去る前に、彼女はロイへの新たな伝言を書いた。短いものだった。あなたの言葉は受け取った、と伝えた。ロイが次に電話をかけてくるまで、その伝言を預かってほしいと協会に頼んだ。

ミンは通信記録簿にそれを記載した。

地方施設では、M-06に問い合わせの受領確認書が渡された。彼女の任用条件には、任用を管轄する機関の承認なしに民間の医療サービスを受けるための規定がないと記されていた。

彼女は職員に、それは要請が拒否されたという意味なのか尋ねた。

「承認が必要だという意味です」

「では、承認を申請したいと思います」

職員は書式を探した。承認を求める目的に該当する書式が見つからなかった。翌朝問い合わせてみると答えた。

M-06は礼を言い、窓口を離れた。

中庭の向こうにある医療棟には、まだ明かりがついていた。そこへ入るのに困ったことは、これまで一度もなかった。あのような建物に入ったとき、何をされるために送られてきたのかではなく、何を望んでいるのかと尋ねられるのは、どのようなものだろうと考えた。

彼女は受領確認書を折り畳み、ポケットに入れた。今回ばかりは、携えている文書に自分が与えられた指示が記されているのではなかった。

上層地区では、ロイがリアンから紹介された、一晩の宿泊を手配してくれるかもしれない場所へ向かって歩いていた。助言に従い、右腕を身体に寄せたままにしていた。ポケットの中の電話の重みはまだ感じられた。

その通りに着くと、二人の自治体の係官が建物の入口の担当者と話していた。三人目の男は少し離れた場所に立ち、携帯端末を見ていた。

ロイは足を止めた。係官が何を尋ねているのか判断できるほどには、会話が聞こえなかった。彼らがそこにいることは、自分とは何の関係もない可能性があった。夜間の開館時刻までに彼らが立ち去る可能性もあった。

彼は診察のことを思った。医師が、自分にはもはやできなくなったことを記録していた、あの一枚の紙のことを。

通りの向かいにベンチがあった。彼はそこまで行って腰を下ろした。

翌日には予約があった。病院を出て以来初めて、自分が現れなければ誰かがそれに気づいてくれる場所ができていた。

入口の男たちを見つめた。扉の上の明かりがついた。

自分を助けることに同意してくれた人々のいる場所が、別の人々が自分の現れるのを待つ場所に変わるまで、あとどれくらいの時間があるのだろうと彼は考えた。

第06章 終。